櫻姫全傳曙草紙三

へ13
185
3

平林

櫻姫全傳曙草紙巻之三

江戸　山東京傳補綴

好文堂

第九

唖蝦蟇小蛇會両士

弥陀二郎八去る建久元年より今歳承元元年まで十八年の間日本六十余州を回国して霊場宝地いくつぞ所もあるそなたこの国なたこの郷に寓居して諸人を勧化しこのごろハ陸奥みちのくに且古郷に入て都ののつさめをもとめやと頻に思ひて故路ふのぞく桐州足柄を越竹の下道を過れば時俄に時雨そそぎもとの傍の辻堂に入て雨やどりとものあとより竹箒を負ふる雲水の僧おすべて辻堂に入て中ほどに二郎が塵ばらる錫杖と鉦をつまとくとえぢりのぶりた顔にくわんぶの持ふ鉦の裏に常照とりに文字ハるさやとつふふぞ二郎いろあもろうと答ふ

曙巻之三

ホ3
185
3

旅僧再ひん又其二つの物ハいづくに持るゝや必定いとまめんと云
二郎此僧をよくくゝふ前の手額ふ火印しるし僧ふよく似るとべ
大ふのゆゝ恭いひけん此二品ゆうたくへ難有そうさ物語ありかとうく
きうせゆんとくおのゝ元来悪性なり支を始とくく淀の一口あて頭陀
の沙門の額ふ火印しるし栗生野光明寺の釈迦佛の額ふ火瘡乃
痕あること佛の告ふよう淀の神の本ふく霊佛を感得し悪二郎とゝ
名を更く弥陀二郎と呼るゝと回国修行ふ出るまゝ細ふ語？
法坊の容貌其時の沙門ふよく似るとくゝぶるりとゝ旅僧ゆとるる
果くゝ沙ゝ御告ふとゝ我方ふも又いとゝたゝふゝ物語のり空
ひゝて語ゝ抑愚僧ハ黒谷上人の徒弟ふく専修念佛の行者
なり去れ建久の頃ハ山城国ふあり毎日淀の辺を勧化しるし一夜の夢ふ

容貌端麗の二宿枕ゝふたらくのゝるゝ汝此後淀の辺ふゆくこるゝ
若ゆゝべ必必大わゝん汝ゝ鉦と錫杖を我ふ得させよ我一人の悪漢を濯度
とべゝとゝめ用ゝ和ありとのゝゆふとおゝぶえゝく夢醒けゝぶ傍ふゆゝとゝる二品
已ふ失さゝる思ゝ僧ゝ法号ゝ常照とゝふゆゝるふ鉦の裏ふ其文字を綴つけ
おゝとゝめ今ゆん又の携ゝゝゝ二品ハ我所持の物ふゝるゝ其後淀の辺ふ
ゆゝゝど打さゝゝゝくくハ夢中の聖僧ハ光明寺の釈迦佛ふゝ愚僧ゝ所持の
二品をゝるゝ我姿ふ現ゝゝん又を濯度ゝゝゝ無勿体やゝふゝやゝて
感涙をゝゝかさゝゝくくゝゝゝ其後我阿弥陀の真身を彫とべゝと発願ゝ
八幡の神宮ふ祈ゝく志念捧ゝゝゝ一時太神告玉ゝく阿弥陀仏の真身を彫
と思ゝ淀ゝ弥陀二郎とゝふ者ふ會べゝかゝ真又の弥陀をゝるゝとゝ
のゝゝゝふ山州名跡志に同説ことふゝゝく又の在所を尋ゝふ回国修行ふ出ゝく年

久しく古郷ふ帰らめよりは我常ふ宿願をとげざる故愁ひ居さ
ふ今日こゝにて出會のうれしさよ今語らひて水中出現の御佛
真身の弥陀仏ふ疑ひなくこゝに拜しめ玉へとひけるに二郎も尊異
のおもひなほさらに光明寺の尊像上人ふうつり玉ひ我を渉度むと
しるべうるおやかるべけるや其霊佛に則ことかうこゝ爰をえらさく
拜せられべ常照阿闍梨殊勝の思心骨ふ徹し感涙雨をふるふ
さらに二郎いひけるは小子かねてより一宇の仏堂を建立し此御仏を安置
されべき大願めうゆるふ年久しく諸國をめぐり諸人を勧化し施
中ふもとバ其布施物を身ふおぶることめつらと真のうつりより栗生野の
光明寺ふつゝがなくもさらに已ふ出ばらのひとつとなりいまゞ開山と
なべれ有徳の人を得ざるひ上人は此御仏ふ因縁深くれば
こゝろふ力をそへ玉ひ開基の主とすゝめ給ふ小子かねてより剃髪染衣
の望をめうとのべども主君の為一功をさゝ旧悪の罪を償ひ後ふ
姿をかへ俗を子細めう凡俗の身ふ
志をこゝろまゝ上人ふめづけ給とべ
去りしく善ふ帰しる志念の誠を
建立の事は愚僧も力を尽くもべとく御仏をうけうてかのもが爰ふ
をさめ光明寺ふく再會をべとふ約束やうゆ雨やうれば阿闍梨は
別れ告ゝ出去りし二郎あるゝ仏見おろうゝ立る折も野寺の鐘入相を
告ゝ日もくれるんとすれば寧此堂ふ一宿をべとおりひ鉦打ゝし念佛
まうしゝ居るふ忽一陣の冷風さと吹ゝ木の葉をちし二郎が身ふ
冷こゝろとおゆえしが何方ともなゝ一條の蛇いで来り石の地蔵の背後ふ

弥陀二郎
辻堂ふ時雨と避て常照阿闍梨ふ遇小蛇尾長蝦蟇と喧ゝ両士ハ會ぜゝむ

入てみれバ畳紙の様なる物を咥てふるびのでゝきたり紙をくひ破り裏より
蝦蟇の手かゝびたるを出しくるしんだる様子なり二郎怪しく蛇を追かけ
かの蝦蟇をとらへてみるに長き尾ある蝦蟇にて尋常の物にあらねバ
まさしくあやしき石仏のうしろをうかゞひみるに若き旅侍熟睡の体なり
二郎錫杖をとりて床の板をつきならしけれバ彼侍眠りより醒し欠し伸し
つゝ二郎をみて汝何等の奴なれバ我ねふりをさまたげつるぞ修行者に
打扮て盗をする奴なるめりとて拳を上てたゝかんとす二郎其腕
をとらへてさらバ汝こそ賊なれこれをみよ今一つの小蛇出来りて此物を咥
出したるハ汝が懐中に疑なし世に希なる此尾長蝦蟇を持たるハ傳へ聞
蝦蟇つかひの賊にまぎれなし捕へて糺明をもたゞさんといひけれバ
腕をかへして捻倒とせしが此侍もさる者なりければゑいとこたへてちつともせずと忽

一脚を飛して二郎を踢倒さんとす二郎素早業の達人なれバひらりと身を
閃し背後より組つくを彼侍總身の力を肱にあつめ呀と一声叫て肱
もて二つにおしたれバ二郎堪ずして手をはなちしが又組つかんとするを
おくれつゝもひたすら堅固なりしに汗水になりて捻合ぬ時に山
の端を上れ夕月夜の光りに乗じ彼侍二郎が顔をつくづくと見て権
まされよおん身ハ真野の水二郎殿にてハあらずやといふに二郎原の名を
呼れてつぶりをあげて手をとゞめれバ彼侍かさねて云小人丱角の時なれバ
見忘玉ひつらん篠村八郎公連が一子次郎公光なりといふに二郎驚きつ
べしこそみおぼえし所残もなくて互におもひがけざる出會を悦びて限りなし
公光いはくおん身いかにして此蝦蟇のいはれを知るや二郎いはく小子今ハ
剃て先非を悔主君の御一切を立て旧悪を償とおもひし折から前年主君の

愛妾玉琴を蝦蟇つかひの賊奪ひ去りしと申す彼者ハ原白拍子にてありし時小人见知りたる女なる由去らば諸国修行のついでかの賊徒を尋玉琴の生死を糺明して一切にせんと心急しが今蝦蟇を見つけて抑ぬ才ぐふ夢にもあらざかの賊徒なるらんとおもひて無礼の事におよひつおん身ハ又何の為に此物を持玉ふぞといふ公光これに長くして物語ありして玉琴が奪れし父八郎公連自殺しるまで主君の仁心ありしいとめがたまわり玉琴の行方をさがさんため十七年が間諸州各府に寓居し憂年月を送る事を物語けれバ弥陀二郎もじめて其仔細を知ゆのなとも又霊仏感得のごとなどとりまぜて物語夜もすがら互の艱難を語りあひて夜をあかしつひに再會を約して別去りけり

第十　櫻姫慕二宗雄一臥レ病

さても櫻ひめハ三木之助伴宗雄をみそめしより国に皈てもしばらく忘れ一向かりそめにせまりけれども何方の人いかなる者と其姓名をしらねバ知ぞ物やおもふともかの人のなく語り慰むかたもなけれバものおもひつひに病とあらはれつゝやくやくにたりて面痩身もやせりけれバ漢の李夫人照陽殿の病床に臥たるもかくやとぞ人申しけれ善治夫婦大に驚き名医をむかへ良薬を与へ種々療養をくはふるといへどもあへて験なし野分の方ハ子を憐むこと世の人に越て厚く強悪の志にハ露ばかりも似ざれバ姫の病を深く悲み終日終夜枕方にそひ心を尽して看病けるが其かひもなけれバ聡明怜俐の胸も子故の闇にくれて大膽不敵の志も子をおもふ情に弱り高僧知験の加持祈祷ハ更なり堀川の盲入道の占照日の神子の梓にまで問ど其病根さらにさだかならずいかなる病といふべきものもえざりければ其

櫻姫伴宗雄ハ
病ヲ則義治夫婦ハ
悲名医ハ
良薬ハ用或ハ加持祈禱
或ハト筮梓の法
心ハ尽ことゝも
快験カ

年もくれ承元二年の春ふるり櫻ひめの病もそこくこころよくなる
ままに双親の喜びなのめなるを保養の為宮脇村の下舘ふ移
し侍女女童めまさきへく歌合繪合糸竹のもてあそぶ心地慰せけ
頃も三月の天ふく百花めくさひ開き烏雀巣ふ戯れ佳氣人公を
催す時いとり庭上の櫻今ふ盛なれど姫ハ日ごろ好る花をうるもう心憂
ひとりく去年の京上りの時を思ひいづるに宗雄がこゝろの胸ふ絶ど
こゝろおりひをなやまし一日侍女等打寄ひなる慰種ふて爛熟る
花の下の小軒子ふ姫をうしろ十種香貝合などさまぐの遊ひ〳〵居る
折しも手飼の猫櫻の枝ふ蝶の花をつけ築牆ふかけのびりく蝶ふ
くるひけるぶくるひふしとびくるくけ紐とけく花の枝ふかゝる猫をめとり
所ふ花飯りぬ爰ふ又三木之助伴宗雄ハ父の召仕ふ悪妻の讒言ふよりて

其身露ばかりも罪なとのべども父希雄の勘當をうけ播磨を去りて當國ふ
流沈りるが此四五日前當所ふ移り此下舘の築牆一重ふへだてたる空屋を
もとめく住め彼生得閑雅ふしく常ふ書を讀ことを好こ詩歌を吟
琴を撫しく樂こゝろとさく一日外の方ふのぞく鬱悶をなぐさめくるふ
築牆ふ越く此方へとのぞる花の枝ふ物かり風ふのまく今こゝとひさめ
宗雄竹の竿をうり打落しくとる小金銀の鈴をつけさる錦のくけ紐るり
こハ必隣屋敷の飼猫の頸綜をめとひくうどちるがめと笑えくん塀
越ふそんこうさの物ふくんべりやへしくるつまとつふ宗雄くれ女梯をこと
く塀ふのぼりかの紐をなげつけいるくへ櫻ひめの侍女なる人此
時宗雄と揚ひめ顔ふ入給めまうふ和りひかけざるるもこバ互ふこゝ夢
うくくと胸をうくとどろかり姫へうもさくこゝ赤こ赤くなり

く行とのふべれどもこのもは宗雄はかまこい宇治川わくまもえもれ上臈ふ
疑ふ〜さそへ鷲尾の息女ふくあひしうとはじめて知るまで卒爾よりのも
ひもろく梯をおりく裏ふりぬ姫は遊び業も手ふつゝど理心もるげ
おくさるゞ酔人のごとしおもふ宗雄おりひけど隣ふ家をゆとめ
まつく宿縁の深さゆて縁のまべ千里をへだつとも逢易縁のけまべ面
紙對とれども見ること難とふ常言のたぐひるべ〜わ〜て梯ひめはやり
のあまりふくづほさ紙ちのび侍女等ト公のうち紙語こしけまべ侍女ども
計を生し姫ふ文かせ紙鳶ふ四ひつけく室ふめべ糸をきちくとるち
はまべ風ふうれく宗雄が書を讀窓のもふおちぬ宗雄これをひろひろて
文をゆれるふ紅梅檀紙をゆ重く日来のかるくるかりひをこま
ふのべられ筆のもとびも拙りもどふ宗雄もふはゆりひふめくれ居る

折なまばいもがい〜返書をかさく又紙鳶ふゆひつけ風のかゝれを
まちく空ふのびけまべ隣ふハ侍女等こくこれをいうつけ翠簾の鉤
をなげて紙鳶の糸ふうゝ返書をとりて姫ふいさせべとる手おそ〜こ
ゆれるふ其情我と露ばうもふのねばうまく〜さふとどこれう
病の氣もいつくへうまさ度くかゝわせ文をとり見て逢見をう紙とう
ぬさく一時宗雄が文の結末ふ一篇の詩あり

翩々雙蝶　時入二苑中花
相見撫琴坐　西隣是卓家

櫻姫も文のおくふ一首の歌をかさくつうう〜う
めうどとられ梢の花〜中垣のそるとふち〜と風もふうまひ
さて侍女ともとうく一夜宗雄をものべせうう　宗雄庭ぐるひふ来う

月明ふ乗じて四方を顧るふ庭のせふ植並さる櫻花ハ錦の帷をひろ
げたる木の間くの躑躅ハ紅の氈をもてるふ似たり松ふかうる蔭
波ハ風ふそゝぎて琉璃の瓔珞を連るふひとし池ふのぞむ茶磨
露ふちらゝく琥珀の連珠を貫るふ異なるもの假山のさゝきまひやう
水の面月一ツうつく雅なるハ閨房の光景をえるふ軒端ふ玉ぬ
かざりうる鶯の籠をうけ窓の下ふ書案をまうけ紫のかうの錦を
ちらく縛うけ地ふ蒔る硯箱をかれ手ならふ及故ふ
ゆやさやふ地巻うるゆめまくらしつ傍ふ螺鈿の厨子めう
れい櫛の箱打乱の箱香具の箱など諸の調度ぬ収れ所なれて
櫛架ぬいろくの繡纈今様色のたゞひの小袖とりぬ取具しく
けうけ文車ぬ世ふ希なる草紙どりぬつゝめ璧ぬ定家家隆を
ちらめく當時名高ち歌人の色紙をおしうものりふ琵琶和琴
笛のたぐひをなべぬさべくの物うる艶ふ微妙なり黒方侍徒のたぐひ
ふやたたりのかううちくひくふ人間のうちとへおのれを仙窟ふう
けうとうさぐるまめれべるぬぐ富貴の光景うると且心中ふおどろをく
櫻ひめ立出く宗雄を几帳のもとふいざるひけるぬ侍女等美酒嘉殽
をさゝげくりて慰め姫ハおりひめせまうく病ふ臥うる日来の出情を
語くうる涙ふ袖をめくせべ宗雄ハ父の勘當をうけく當惑ふとへ
おりひうけど隣家ふ移られぬ語く奇遇のそぐぬ嘉びうる姫
いくく此ぬどのやうぬせ文ぬくとろくべるふ君ハ風雅詩詠をよくし
手跡も古人ふくらぐ玉いど妾も又愚なるぐう歌よくく繪かくるぬ好うめ
このごろ都ちうめくうる物語繪ぬ人せまうくせんとく取出さんと

櫻姫病を保養のゝめ
下館ゝ移る伴宗雄父の
勘氣をうけゝ丹波ゝ
さまゝゝへの館の隣家ゝ
住ゝやのひうけゝ
櫻姫ゝ遇

一しむ宗雄これをみるふ小野小町が一期盛衰の事を圖しうる繪ふて神
彩飛動誠ふ絶筆なり繪詞をこゝにしるす小町家ハ巨萬乃
富をもて容ハ三千の美ふまさるこのべも若しく双親兄弟を失ひ老
く子孫親戚ハ紅顔も垢面と変じ玉躰も痩身となりつゝふ丐嫗と
なりて路頭ふ臥おのふふ古より世ふもてれる佳人よく終身の栄花を
保者まとなり昭君色三千ふ奪ふも塞外の塵を免るゝことのさいと
楊妃寵一國ふ隆けもとゞも馬嵬の死を逃がゝ造物の盈ふを忌都皆かく
ゝ彩雲ハ散ゝ花ハ碎ゆゝ理いかんともとゝべゝゝとゝ
て嘆息しけるゝ猶ひめこれを安のくまゝ人の盛衰ハいろ誰身ふ
めんもまゝゝゝ妾がこゝきも翌のとゝふとゝさゝとゝ
なさ世の中なりゝゝ涙さゝぐゝゝ侍女等ハ両人がゝるゝ物語ふ
時をうゝふ分りゝ白くゆりひ姫の耳ふ入てゝゝゝゝ姫ゝゝ
宗雄ゞ手をとゞさて鴛鴦衾ふいりあゝゝ両人ハ希なる契ふ春の夜
のあけやすきをゝゝゝゝ曉を告れ雞の声ふ夢をゆぶり驚
をりるゝゝふ打驚ゝ宗雄起上り又のあゝせふ契ゝゝゝゝ
櫻ひめ袂をひゝ今更ふゆりひをまゝめゝゝ昔ゝまゝゝひく
袖をまゝりけゝゝ宗雄も打ゝ出ゝゝこれを始ゝて
折ゝものびゝゝとおゝゝ三月ゝゝふおゝびめゝゝ侍女等の外ハ
新人さゝふなりゝゝ

東鑑を案ふ。實朝公度ゝ繪合の儀あり。奥州十二年合戦の繪。小野小町が
一期盛衰の圖。吾朝四大師の傳の繪。源氏。承元中のと
おく。本文の時と同代なり。此頃ハとゝて。物語繪のおこなられる世とおゞ。
又案ふ。建保職人哥合の繪も。實朝公なゝの好ませゝまゝるゆの事

第十一　夜襲第勝岡亡義治

かくて一日播州より伴の家人狛野丹作といふ者轎子につくせく宗雄
ゲ住家を尋来り此度君の御勘氣ゆりぬふよりまもひのうめまうり
越めとく〳〵御敗國めくとく〳〵父希雄ゲ自筆の免状を与ふ宗雄
かーいつでこく〳〵これ以讀ふ悪妄の讒言ふよりく汝濡衣の罪を得く〳〵
支分明くるふより此度妄罪ー汝をゆるとと其實否をたづくこどて
勘當せーい我誤ありとく敗郷いくとべーこせさらり宗雄讀をつり二頭
ふい勘氣のゆりーる以ちぶとのべども一頭ふい按ひめふ別人こ以悲しかくと
ちりせぶ其心支度もとびきりのをと權思案よくれくるぶ私の愛情
ひくれく遲滯せんい不孝のいくりうるとと心以轉ゲく奥の間ふ入り
一封の文をちくくめ文鎮ふくりけく塀越ふ擣の庭中ふ投入家財

を四五箇の擔子ふつくく用意の乘物ふ乘移くれば丹作
下部ふ下知ーこれを守護くく急去くりくく其日の夕つくく姫の侍か
かの文をこんつけく姫ふえせーめけどび姫ハつひのかくふせ文こ却りひつく
ゑくれこくふ俄ふ敗國のはに以ちるくれば以讀より胸つぶれく悲さふ
堪ど文を顔ふ却ーたてくで泣ふーけくこれくり上館ふ敗くく又病の床ふ臥
けどび義治夫婦再驚ゲ日夜心以いさあくり妻ふ又姫の守り女山吹ら
こつれ頃父佐伯平除二郎まくりけくふより私宅ふ却り居く喪ふこくり
くくぶ忌明くく館ふ上り姫の枕方ふそひくく看病けくゲ病のさもをのぐり
ひくくふ侍女等以責く問けくふちくぐの妻めしこと語けどび果ーて我
推量ふくぐつとと野分の方ふそのは以告ゲ野分の方義治ふ語り彼ゲ
望をとげさせ王ぐ病もおのづく怠るべー仕ゆも命ふハべくくくぐ

伴善雄紀名虎相撲ノ事文德實録ヲ始メテ正史ニ見ズ

とふぞ義治も其意ふかくひ人をもて宗雄が家系及び為人を問しめけるに其先祖は人皇五十五代文德天皇の御宇畢賤より出て高官ふのがれて伴大納言善男宇治拾遺の末孫ふして父は播州宍粟の郡士伴希雄なれ頗權勢あり宗雄は美貌秀才相兼て武藝文学ふ通じ詩歌管絃のたぐひ学び業まで尽くこれを曉しめと語られば義治大ふ悦び我婿ととるふ不足なしとて急ぎ媒人をたのみて播磨ふつかはしそのひいとくれふ幸宗雄は次男なり殊ふ鷲尾は當時ものびなれ長者なれば希雄速ふうけひきて己ふ支ることひ双方喜ぶの限り姫の病もや怠けるべきちなれふ吉日ふ成えて宗雄をむかへらるべきふきまめなり美ふ又信太平大夫勝岡は望けふうけがるるふ

誹謗せるに其後櫻ひめを奪んとて田島造酒丞ふ家人を打遣て遺恨重て無念骨髄ふ徹し義治を亡て山林田庄ふ奪櫻姫を盗取て妻ふせんやと密ふ和ひ立といへども鷲尾の家中ふ勇士めれば容易ふ手ふ出ずして月日をるしけるふ前年鷲尾の獄舍を越て逃去る強盗蝦蟇丸愛宮の山奥ふかくれ住義治を打んとつけ狙ふよを密ふ召寄て計を与へ折を窺ふ櫻姫宗雄と縁さもりる支をなて殊更ふくちをくちれうへ火急事を起んと其支度をそなふけるるに蝦蟇丸はものびの達人なるふより一夜鷲尾の館ふものびて義治が寢所の床の下ふかくまて熟睡の時を窺床の下より首をとり焼草ふ火薬をつめて床の下ふ投入ける時侍寇の武士等出會けるば急ふのがれて池の中ふ

強盗蝦蟇丸信田
平太夫が計を得て
義治を打平太夫
夜鶴尾の
第宅を襲
鶴尾一家
滅亡を

飛入水門をくぐりて逃去りぬ御所の火燃上り折しも風烈夜なれば忽
館中一面の火となりこれさへ膳つぶるゝふ忽然として貝鐘太鼓の音
もくたけまべ唯めきれふめきれるだりうり時ふ信太平太夫勝岡身上
おごそふふとひめまこの良等を具して馬をとゝめ関を哄とつくりく乱
入けまべ館中の男女めつゝふさめたこいうまことをとおめたさんぶ
色修四維道ふ異なるぞまりといへども此館中ふへめまこの勇士めまべぞ
箇く得物をとりて向會命をきらふ猛勢をふるひて戦けまと平太夫
かゝゝ野武士山賊のしゝびをめゝひ良等のうちふくへけまべ人数ふ
ふほ〜蔦尾の良等ハ主君を打まと不意を襲まと殊ふ素肌の戦なれば
心ハやうけふ防りふといへども防ゝ義ふのこゝゆる責ハ主君を打まゝく
生るゝへ行の顔めんとおりふさぬふ戦ゝ打死まるもの慮深者ハ權一命

を保後日仇を報べしと一方を斬ぬけゝから行もあり信太方の者等も
過半打まふゝ野分の方ハかゝゝ男まさるの婦人あまべ家系の一巻
を懐ふ一の谷合戦の刻ゝ九郎判官殿義治の父経春ふ賜さる金作の
太刀を家の宝器ゝ〜おさめ世さるを取出ゝ腰ふおび馬ふ打乗
長刀を打ふゝ一方を斬めけからほゝく逃出けるゝ外うちふのまゝ矢を
うけゝ朱ふ染り手綱ひくりつ〜揆ひめいづくふのるひめよくと呼て
げゝふ又敵兵追来てとりつこむ四面八方ふ斬まゝひ馬も矢疵ふ堪ず嘶
と倒まゝれば歩行立ふるり長刀杖ふつたよろめくめ武ふゝきめつ
ゝ櫻姫ハ尋るふ矢疵やいゝこゝくものびがゝく炎頭上ふふりゝ外うち
ふ燃つき誠ふ逃かゝるゝ折しも義治が乳母子の宗我部和五八とふ
者遥ふえつけゝ馳来て危ゝ武をとひ出ゝゝゆち行りゝ横ひめハ父

野分の方敵中を
きらぬけ〳〵
のまるこ矢
痛ましひ
かのほのうち死
かけめぐり〳〵
櫻姫をうばひ
身体つれ
とる死
曾我部
和五八
分抱
しく〳〵
落
ゆく

山吹
ひ
敵
とら
ひ〳〵
櫻ひめを
とふ

打まてと宣我身のくいさのこうく何のうひめ〳〵闇路をたどらんとこゝみ
猛火の裏ふ飛いんこゝをを山吹めらく抱くめひとまづかちて母君の
御行方をも尋ゐとこゝらへくとりゐひ出けゝる敵兵えつけく馳来こ
姫を奪こゝんこゝを山吹刀とまろ〳〵いどく戦といへくも女のかふ地よりバど
わとぐ危かうゝれ所ふ田島造酒丞飛が如ふ馳来こ焼からこゝれ関樋こ
こゝく群敵を打倒けもべ火花さと散こく時ふもめ〳〵く螢火のゝ色をつゝ
如く敵兵此勢ふおこれく逃去けもべ造酒丞山吹ふむひとく姫君ゝ
おこちゆこれ我ハ野分の方の御身氣づけもべ今一度敵中ふいりて
尋めべくく両人をおこ〳〵ゆこうこの身ハめこふりどうこうこれべ野分の
方へ和五八ふこくこれておち行稚ひめハ山吹ふ扶られこ走こ互ゐこの
ゆくさこを知らざりこう

第十二　蝦蟇丸傳帶取池記

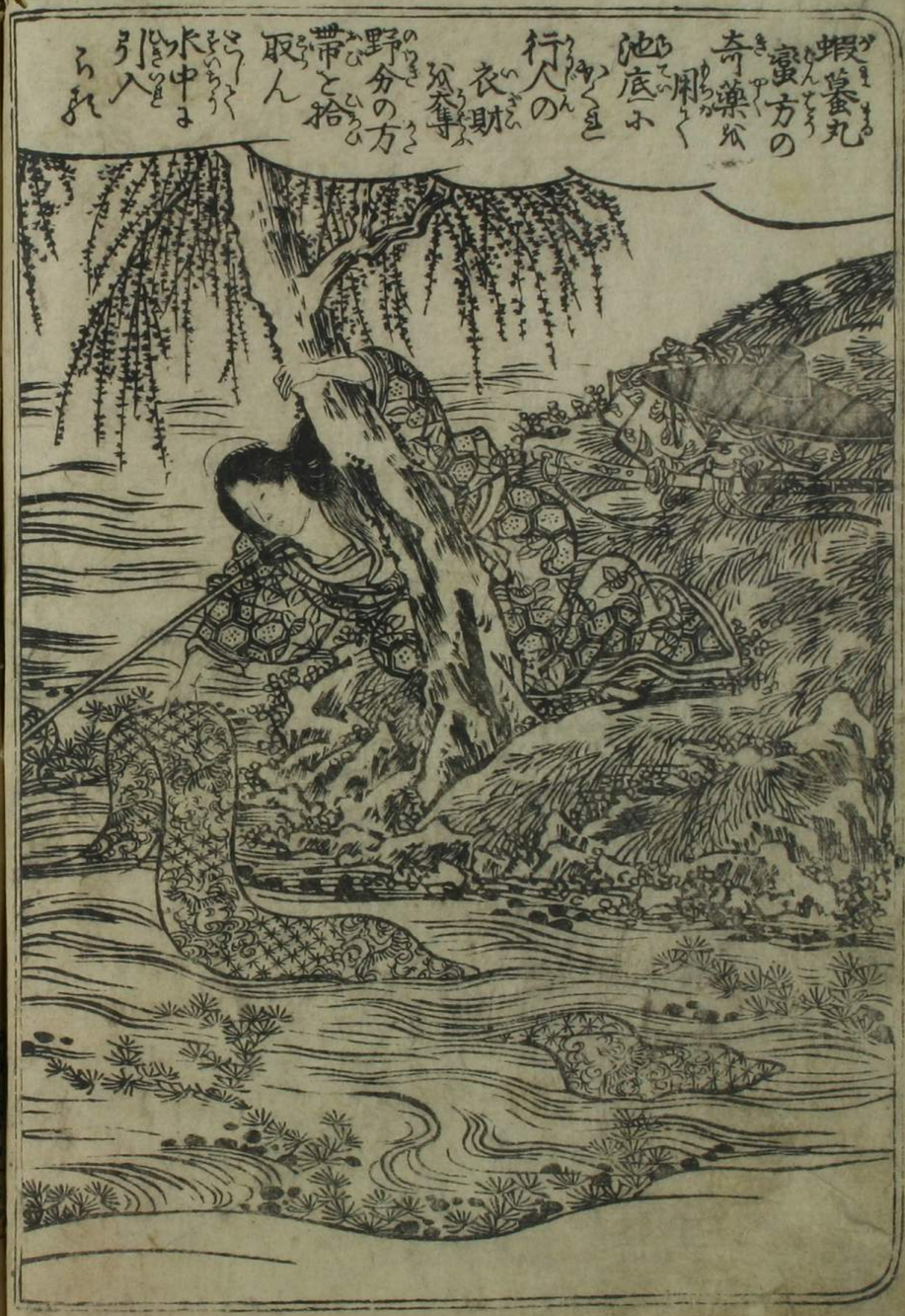
さても野分の方ハ生野里和五八が親族の家ふ深くかくし居こく矢疵を療
治こくこを三月ばかりふ平太夫勝岡桜ひめの行方を尋れ
どもこれを野分の方ハ手ゝ負こんべ必定遠くハ走れまじ捕こく人質こ
ゝ

猛火

ひめゝ手ふいまこんこく勇れこをゆめの家ふも居こく播磨ふ
ゆくく宗雄をたのまんゆもかくれ身ふるくく面目なとやせまじかくも
こべたと思案まこれこゝけるゝ和五八いひこれいづれの道ふも此所ふ長居を
ゐらんハ氣づうじけもべ小人京都へこりゐひまゝくく良計を御ゝ
を安化をまこんといふゝ公をさごめ家系の一巻を忙慢ふつくく携室刀ゝ
腰ふおび和五八を具一夜ふまこざれくこのび出道をいそぐこゝ亀山越の
山路ふさしかゝりける時信田の良等追来こくわとく捕んこと野分の方

刀をぬいて向會けるべ和五八の中ちのふるこゝに小人ふまにてこゝ
走りゐるべといさめくおゝ中ゆう秘術を尽くして戦ひるが敵い多勢なり双拳
四手に敵しがたくつひに打ちふるふ野分の方へにげ去りたるが
北嵯峨山我のあるうまぐ逃来り咽をうるかさんとめるうの池水を掬し池の
面をうれば色よろ帯一條水上ふうきぬ玉簾錦茵のうちふあしらせし
身も俄に零落して仏まぐいかくまりうるふや命ゆりひるふ敵多勢
なれば和五八も必定打ちつん少のうくも彼が身ふつけさしられば飢
ふのがんてぐさへるる折ふこの物をえうけうるふ天の与へなりひろひ取
く路用ふうゐべこと色をうとうふおれ脇をのべくかの帯をとうんうるふ
怨水中より鉄搭を生て水底深く引いれぬ是乃蝦蟇丸が仕業なり
爰に蝦蟇丸が仔細を尋るに過年鷲尾の獄舎を脱て北生より

奥にあるこゝ其後當國に来て爰宮の山奥なる農家の夫婦にて
ある女の容貌美麗なれば心迷ひもつて後の夫とするめ其妻の名は
小萩といひちごろ眼病をわづらひて盲目となりぬ是ば蝦蟇丸一向
これ恐ゝ前の夫の女児二人あり姉は十三歳にて名は松虫といふ
妹は十歳にて名は鈴虫といふ二人ともに世にもすぐれぬ蝦蟇丸
は元来海賊木冠者利元の子にて父より傳へる南蛮奇薬の方あり其薬は
耳目鼻口にぬれば水中にありて見聞言語をなすに陸にある人の如
誠に奇方といふべし蝦蟇丸妻ゐて京の町へ通て物賣といひ
北嵯峨廣沢のかたらの池の面に色よき帯は
うかめゆれ往来の旅人これを拾取人とする者あれば忽水をくゝりて水底
へ引こむ縊殺して衣服金銀を奪取て年ごろあるりの奇薬は用


蝦蟇丸
蜜方の
奇薬ゟ
用ひて
池底ゟ
くを
行人の
衣財
ゟ奪
野分の方
帯と拾
取ん
とて
水中ゟ
引入
られ

されバゆゑに水中のすみかハ素自由なり妻小萩ハ志正者なれども此
事を露しらざりしを郷人ハ池の主帯に化して人をとるといひおそれて
ちかづく者なし後世に帯取の池といふハこれなりとぞ（山州名跡志の説と異同あり）
けれバ信田平太夫ハたのまれて義治を殺害し宿志をとげたる
うへにあまた賞金を得て悦び家にもかへらで妻子をさそひて其場
よりすぐに古郷日向へ趣くとて播州室の津より船に乗しけれバ
牛窓の海上にて船くつがへり水練の達人なれバ一命ハ恙なしといへども
かの賞金を失ひ古郷へ帰らんもかひなく身の薄命を歎てむなしく家に
立かへり又かの悪業を直になりされかへるに蝦蟇丸野分の方を水中
に引いれ己に縊殺しくよしくてされバ年ハもよしく盛をすぐしといへど
誠に絶世の美人なれバ俄に心を轉じいそがはしく茂林のうちにたゝずみ

ちけ水を吐しめなどしく介抱しけれバやがて人ごゝちつきぬ蝦蟇丸
をかたへ召て申しけれバ蝦蟇丸いひけるハわれ身の申すにつき池におち
しにたまひしを小人幸にもすくひまゐらせぬ御姿を見申せバあまたのおん方
にもまさりぬかへざれバ従者なんども何にひとり此辺をたどり玉ふにや必定
されからん小人が住家ハさまでに遠からねどもなにしますかへすくまゐらせ
給はれかしとていざなへといふに野分の方ハ心なくおもへどもいへども
膽ふとき婦人なれバ且彼がさまでにさりとてはいはじと思ひて脇をさぐり
一色をとりつひにいざなはれて蝦蟇丸がかくれ家に赴きぬ